

# 学習院大学図書館「乃木文庫」からみる乃木式義手～乃木希典と石黒忠恵と癪兵～

大 内 雅 人

## 論文要旨

本稿の目的は、①石黒忠恵談『乃木式義手』、②乃木式義手を装着して煙草を吸う癪兵の写真葉書、③ドレスデン衛生博覧会の乃木式義手に関する解説文の独文和訳、といった史料を紹介することを通じて、乃木希典、石黒忠恵、「癪兵」の三者のかかわりを問い直すことである。このうち、①②は学習院大学図書館所蔵「乃木文庫」、③は陸上自衛隊衛生学校「彰古館」に所蔵されている。乃木式義手とは、日露戦争で両腕切断された「癪兵」のために、従来にない「能動義手」を作ろうという陸軍大将・乃木希典の想いに動かされて、新たに制作された義肢である。乃木式義手は明治44（1911）年のドレスデン衛生博覧会にも出品された。従来の医学史研究では、乃木式義手は実用に適さないものとして低く評価されてきた。本稿では、医学史的な評価からいったん離れて、乃木と石黒と癪兵との心的な繋がりを強調し、乃木とそれを取り巻く人々と史料のなかで、乃木式義手の意義を捉えなおしたい。

**キーワード**【乃木式義手 乃木希典 石黒忠恵 癪兵 戦傷病者】

## はじめに～「癪兵」がいた風景～

明治・大正期に活躍した演歌師である添田啞蟬坊の「ノンキ節」には、つぎのような一節がある。

二本ある腕は一本しかないが  
キンシクンショが胸にある  
名誉だ 名誉だ 日本一だ  
桃から生まれた桃太郎だ ア、ノンキだね<sup>1)</sup>

演歌とは、巷の唄、つまり路傍から生まれて、社会の底辺を流れた歌の謂いである。日露戦争後における東京市中には、一生癒えることがない戦傷を受けた「癪兵」が姿を見せた<sup>2)</sup>。また、添田は、別の歌「どこいとやせぬカマヤセヌ節」でも、葉を売り歩く「癪兵」を唄いこむ。「癪兵」は、いわば日露戦争の落し子である。ついこの前まで、日本社会には、「癪兵」がいた。「東京からなくなったもの」として、四方田犬彦は「傷痍軍人」を挙げている。

傷痍軍人が消えてしまった。わたしが最後に見かけたのは一九九五年暮れの討入りの日に泉岳寺の境内で、「平和祈願」という額を掲げながら石畳のうえに跪いている白衣の老人ひとりだった<sup>3)</sup>。

本稿の目的は、①石黒忠恵談『乃木式義手』（小冊子）、②乃木式義手を装着して煙草を吸う癡兵の写真葉書（『戴冠式紀念絵葉書』）、③ドレスデン衛生博覧会の乃木式義手に関する解説文（『大日本帝国目録』）の独文和訳、といった史料を紹介することを通じて、乃木希典、石黒忠恵、「癡兵」の三者のかかわりを問い直すことである。このうち、①②は学習院大学図書館所蔵「乃木文庫」、③は陸上自衛隊衛生学校 彰古館に所蔵されている。

乃木式義手とは、日露戦争で両腕切断された「癡兵」のために、従来にない「能動義手」を作ろうという陸軍大将・乃木希典の想いに動かされて、新たに制作された義肢である。義肢とは、「手足ノ失ハレマシタル機能ヲ恢復シ、醜形ヲ除キマス為ニ装着スル人工的ノ手及足ノ総称」である<sup>4)</sup>。乃木式義手は明治44（1911）年のドレスデン衛生博覧会にも出品された。義手の原本は旧陸軍軍医学校の史料を保管している陸上自衛隊衛生学校 彰古館の所蔵



【写真1】 乃木式義手（しょうけい館所蔵）

であり、その複製は東京九段下・しょうけい館（戦傷病者史料館）に展示されている。[写真1・2]

現在の医学史において、戦前の軍陣医学はほとんど顧みられていないのが実情であろう。乃木式義手もまた、実用に適さないものとして低く評価されてきた。たとえば、武智秀夫は、「もちろんこの頃の欧米の水準から著しくおくれたものであった。その上医学と全く無縁の将軍が義手を考えるというのも、当時の医師達が義肢に興味を示さず、切断者への社会の対応が未熟だったことを物語っている。この義手もほとんど用いられていない。」と位置付けている<sup>5)</sup>。本稿では、医学史的な評価からいったん離れて、乃木と石黒と癩兵との心的な繋がりを強調し、乃木とそれを取り巻く人々と史料のなかで、乃木式義手の意義を捉えなおしたい。

なお本稿は、学習院大学文学部・人文科学研究科「平成15・16年度 学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」における、乃木文庫整理・調査の成果であることを付言しておきたい。

## 1、学習院大学図書館「乃木文庫」

学習院大学図書館は、乃木希典旧蔵書を所蔵しており、これらは「乃木文庫」と呼ばれている。乃木希典（嘉永2〈1849〉年～明治45〈1912〉年）は、山口県長府の出身で、陸軍大将・学習院長を務めた。乃木関連史料の所蔵先としては、学習院大学のほかに、下関市立長府図書館、港区立港郷土資料館、乃木神社があげられる<sup>6)</sup>。

学習院の「乃木文庫」には、大きく二つの伝来経緯がある<sup>7)</sup>。それは寄贈印によって判別できる。①乃木希典による生前寄贈分、つまり乃木が学習院長に就任して没するまで随時寄贈された図書と、②乃木伯爵家（東京市赤坂区新坂町）から移管された没後寄贈分である。②には、「故乃木院長閣下ノ御遺言ニ依リ伯爵家寄贈」印が付されている。寄贈経緯を示す史料として、大正元年9月12日、自刃の前夜にしたためられた乃木による「遺言条々」があり、このうち「第六 書籍類ハ学習院へ採用相成候分ハ可成寄附、其餘ハ長府図書館え同断、不用ノ分ハ兎も角も二候」という条がある<sup>8)</sup>。同条で述べられているのは、乃木が院長を務める学習院が必要とする書籍はここに寄付し、その余りは郷里である下関の長府図書館に寄附したい、という意向である。遺言執行者である塚田清市によれば、「遺言条々」によって図書約1500点の内、玉木正之氏保管以外の図書および写真寄贈の主たるものについて触れている。

一、図書百三十六点、写真二百六十五枚 東京市へ寄附

一、図書約三百七十点 学習院へ寄附

- 一、図書六百七十八点、外国雑誌四括、雑書二十六括 長府図書館へ寄附
- 一、中朝事実（跋文共）、中興鑑言、国基、武教講録、武教小学、孫子 伊勢神宮へ献納
- 一、中朝事実（跋文共）、国基、中興鑑言、配所残筆、武教講録、武教小学、武教本論、孫子評註、九經談總論評説、孫子諺義、山鹿誌、固本策等 以上は大将が私費を以て翻刻し、友人知己等に頒與したる書籍の主なるものなるが、其残部数十冊ありしを以て、親族及特別の関係ある人々に各一部宛寄贈す
- 一、写真千二百九十四枚 親族友人等へ寄贈<sup>9)</sup>

『学習院史』（昭和3年）では乃木文庫の発足と没後寄贈分について、次のような記述がなされている。

大正元年九月十三日乃木院長薨去後、伯爵家所蔵図書の大半は、本院に寄贈せられたり。依りて故大将の遺言書、学習院学則、其の他大小拾余幅の揮毫と、自筆の書き入れ又は評語を加へられたる手沢本総計百七十余冊は貴重書別置書として収蔵し、毎年九月十三日の記念日に其の一部を学生閲覧室に陳列し、職員学生の観覧に供するを常とせり。而して故大将の偉大なる人格気魄は、此等の楮表に躍如として溢るゝを以て、観者をして覚えず襟を正さしめ、真に精神教育上に貴重有益なる好史料となれり<sup>10)</sup>。（傍点は筆者による）

この『学習院史』での記述は、学習院と密接に関わる「乃木文庫」が、いかに大切に保存・展示されていたのかをよく示す一節であろう。なお、乃木の自筆と書込がある図書の目録として、学習院史学会編『學習院所蔵乃木院長筆蹟及手澤本目録稿』（学習院史学会、昭和13年）がある<sup>11)</sup>。また、旧図書分類の和漢図書における蔵書印・寄贈者の調査をもとに作成された、「学習院大学図書館所蔵『乃木文庫目録』」（学習院大学文学部・人文科学研究科「平成15・16年度 学術資料・文書等の管理と有効利用の在り方調査プロジェクト」、平成17年）がある。

## 2、石黒忠恵談『乃木式義手』

学習院大学図書館「乃木文庫」には、石黒忠恵から乃木希典へ寄贈された『乃木式義手』という小冊子がある。もともとは、『国家医学会雑誌』第234号（明治39年10月20日発行）の抜刷であり、石黒忠恵（弘化2〈1845〉年—昭和16〈1941〉年）の談をまとめたものである<sup>12)</sup>。

本冊子の「乃木大将義手を考案せる由来 皇后陛下の天覧を仰ぎし顛末」という項目において、乃木式義手が生まれた経緯が述べられている。乃木が、入院中の戦傷者で両手のない

ものが、自ら工夫して釣状の金属小片を使っていたのに発想を得て、工夫を加えることを思いついた。元来、義手には「モノをつかむ」機能がなかったが、「ヤットコ」(鉗、手工具の一種)の原理を思い浮かべて、関節をとりつけて伸縮屈伸を自在にするようにしたのが、乃木式義手の特徴なのである。乃木は、知人である軍医・石黒忠恵に対して、この義手が基礎となって世間一般の人々が改良をくわえて、戦役のため手足を失った者の為に便利であれば、石黒から広めて欲しいと依頼したという。同史料によれば、この義手は、医学は日進月歩し銃創の治療も飛躍的に伸びたが、義手は依然として従来のものと殆んど変わらないとの石黒の問題意識と重なり合い、生まれたものであった。東京砲兵工廠の砲兵少佐・南部麒次郎が義手の制作を担当し、石黒忠恵が“乃木式”と名づけた。

石黒の『懐旧九十年』によれば、乃木と石黒との出会いは、次のようなものである。明治5年、病床に伏せる乃木歩兵少佐を、陸軍々医寮の権助であった石黒が訪ねた。互いの父親同士が旧知の仲であることを知って、懇意になり、40年の付き合いであったという<sup>13)</sup>。石黒は、明治13年4月ごろ学習院の衛生監督を嘱託された<sup>14)</sup>。大正元年9月12日付、乃木の「遺言條々」においても、「第十 此方屍骸ノ儀ハ、石黒男爵へ相願置候間、可然医学校へ寄附可致。墓下ニハ毛髪爪齒(義齒共)ヲ入レテ充分ニ候。(静子承知)」とあり、石黒宛の遺言書では、「曾て御話申上候如く生存中碌々御益にも不相立候骸骨故に、医学上何かの御用に相成候ば骨にしてなり木乃伊(みいら)にしてなり或は粉にして御捨て被成候而も更に遺



【写真2】 乃木式義手(しょうけい館所蔵)



憾無之。愚妻も納得致居候間、可然御任せ申上候」とある<sup>15)</sup>。

乃木式義手はどのような人びとを介して完成に至ったのだろうか。そこには、乃木と石黒だけではなく、多くの人びとが介在したようである。『国家医学会雑誌』等の紙面において、医師・松島不二は、次のような取材記をまとめている<sup>16)</sup>。概略を示してみよう。

松島は、東京予備病院渋谷分院・保利医学博士に乃木式義手に関する演説を頼むつもりでいたが、保利は断った。保利は、自分の演説よりも良いものを、ということで、乃木が考案した義手とそれを両腕がない兵士がつけている4枚の写真を松島に渡した。保利は、『国家医学会雑誌』に乃木式義手を紹介することで「医学者社会の刺激材料」となるとともに、写真と図を広く全国の新聞社に配って社会に広く伝えることを強く望んだようである。

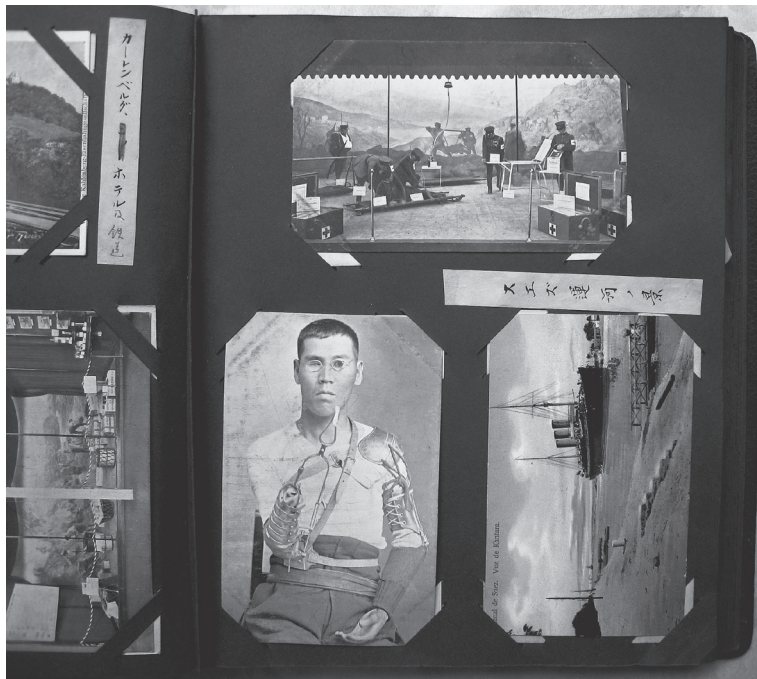
次に、松島は保利の紹介で、石黒に面会して「乃木大将義手を考案せる由来 皇后陛下の天覧を仰ぎし顛末」の話聞く。続いて、松島は石黒から東京砲兵工廠・南部少佐の紹介をうけた。南部は病気で入院中のために、『国家医学会雑誌』に掲載する「義手の分解図」を、技師の村田綱太郎に依頼した。松島の取材によって、乃木式義手の制作に関する工夫は、職工・石川徳松（明治7〈1874〉年-昭和38〈1963〉年）によるものであることが、明らかになった。石川は明治30年に石川ペン先製作所を創業し、明治35年に我が国初の国産鋼ペン先を製造した<sup>17)</sup>。松島は、取材記において、乃木式義手への期待を次のように述べている。

畢竟乃木大将閣下の深き同情より起れる大精神が之に関係せられし諸人を感奮せしめてズーッと此器械に鍛へ込まれたものと思ひます、此大精神は上述の数人に止まらず恐らく吾々医学者間は勿論広く世の中を感奮せしめて此の器械の完全無欠を計らざれば已まぬことと信じます<sup>18)</sup>。

### 3、乃木文庫『戴冠式紀念絵葉書』

乃木文庫の絵葉書帖である『戴冠式紀念絵葉書』には、乃木式義手で煙草を吸っている癈兵・水沼作次郎の写真葉書が収められている〔写真3・4〕<sup>19)</sup>。水沼は、明治12年7月生まれ、原籍は栃木県芳賀郡山崎村、第一師団第二糧食縦列の輜重輪卒であった。明治38年1月2日、清国盛京省下坎子で受傷。両前腕切断、右眼失明、左眼は凸レンズをかけても八尺の距離で指数を判別できるのみ、という傷病を負った兵士である。上述した石黒忠憲談『乃木式義手』にも、同様の写真が収められている。

ところで、乃木式義手が説明されるとき、しばしば言われる、「乃木式義手によって、巻煙草が吸えるようになった」という評価はいったい何を意味しているのだろうか。一兵士にとって、喫煙は戦場における“つかのまの慰安”であり、勤務中に眠ってしまうことを避ける手段でもあった。両腕が切断されて、日常生活もままならず、巻煙草すら吸えない労苦は

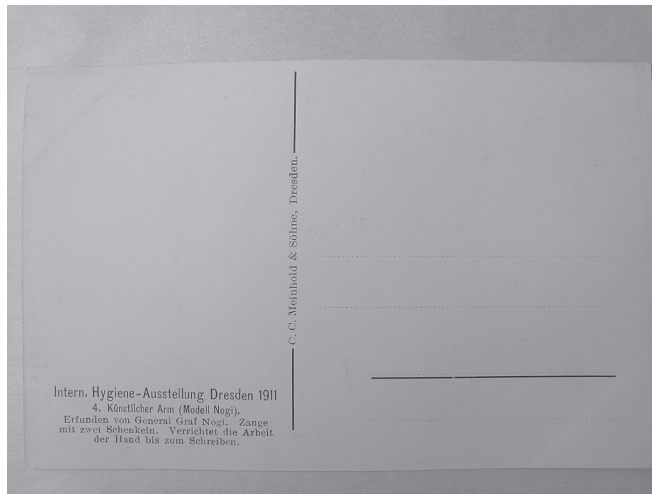


【写真3】「癱兵の写真葉書」表面（乃木文庫）

筆舌しがたい。また、義肢改良に長年たずさわった陸軍軍医・保利清によれば、義足と義手には相当の違いがあるという<sup>20)</sup>。足の機能は体重支持と歩行が主なるものだから、断端を鍛えて体重を支えても痛くないようにすれば、義足の場合はすぐに適応できる。それに対して、手は機能が非常に細かいので義手訓練は難しいのである。巻煙草が吸えるぐらいに、物を強弱つけて握めることが可能となった乃木式義手の発案は、画期的なことであったといえよう。

乃木式義手が生まれるきっかけは、乃木が「癱兵」に心を寄せていたことにある。東京巢鴨の癱病院には、学習院院長の乃木希典はたびたび慰問に訪れており、『乃木大将言行録』（大正元年）にも、「二十 癱兵となつたお陰」「二十一 癱病院への見舞品」「二十二 寄贈者の好意を無にせず」「二十三 感慨深き癱病院の額」の項目が立てられている<sup>21)</sup>。学習院にほど近い巢鴨の癱病院慰問にて、乃木の「癱兵」への配慮を示している印象的なエピソードとして、次のようなものが知られている。

歐洲視察より帰朝後、或る雨の降る日、乃木大将は長靴を穿ち、大塚の停車場より、大なる書物と写真とを携帯して慰問せられたることあり。こは歐洲みやげにして写真は觀兵式と癱病院とのものなり。大将は其の時「此の写真は額縁は無きが、癱兵に命じて作らしめば可ならん」とて金若干を置いて還られたり。依つて其癱兵に命じ陶器にて縁を作らしめ、出来の後、大将にも夫を御覧に入れたるに、善く出来たりとて褒められたりとぞ。而して



【写真 4】「癪兵の写真葉書」裏面（乃木文庫）

其の費用金貳圓八拾銭を引き去り、残餘を返納せるに、大將は受取らずして其は某癪兵に遣はせとて給ひたり<sup>22)</sup>。

上記の史料で冒頭に述べられている欧州視察とは、乃木が東郷平八郎らとともに、英国皇帝の戴冠式に東伏見宮依仁親王、同妃両殿下の随行員として、欧州に訪れたことを指す。明治 44（1911）年 7 月 30 日、乃木ら一行はドレスデンに到着し、歓迎の宴を謝絶して衛生博覧会を参観した。『乃木日記』には、「専門的ノ博覧会トシテハ上出来タルヘク日本館又他国館ニ比シ遜色ナキカ如シ。但専門家ノ批評ニ依レハ学理的出品ハ大ニ他国ニ及ハス少クモ十年間ノ遅レハアリト云フ、又大將ハ特ニ露国館ヲ熱覧セラレタリ」とある<sup>23)</sup>。乃木はこの視察を回想して、癪病院について以下のように述べたと、学習院輔仁会編『乃木院長記念録』にはある。

大將又歐洲の癪病院視察の模様を語られたることあり、同大將の言はるゝに、「癪病院の整否如何によりて其の国の軍隊の価値を知ることが得べく、又国民の軍隊に対する同情の厚薄をもトすることを得べし」と。又「独逸の癪病院はさすがに最も善く整備せり。英吉利も中々宜しきが貴婦人など世話が餘り過ぎて、兵士の方にも御礼を言ふやら、却て少々苦しき感あるが如し。奥太利も将校の家族など善く世話をなせり。富の程度に比して言へば、日本の癪病院などは、日本としては適當したるものなり」と語られたりとぞ<sup>24)</sup>。（傍点は筆者による）

【写真 3・4】は、乃木文庫所蔵の「癪兵の写真葉書」であり、未使用のものである。それ



と同型の写真葉書には、次のエピソードがあることを紹介したい。

明治44年、軍医・秋山鍊造は、ドレスデン衛生博覧会にて乃木式義手を陳列し解説文を加えた。その際に、乃木式義手の写真葉書を作成し、観衆に配布したという。秋山が、衛生博覧会に訪れた乃木に写真葉書を見せたところ、乃木は三葉を手に取り、秋山ら12名も寄せ書きのうえ、寺内正毅・石黒忠恵・森林太郎に宛てて日本へ発信した。後年、秋山は、乃木の書き込みのある写真葉書を石黒より受領したとの回想を残している<sup>25)</sup>。

秋山は、乃木式義手への想いをもち続けたようである。陸軍軍医学校参考館主任を務めて、癩兵の人物模型を作成し、同館にて乃木式義手を展示した。その乃木式義手は、東京都世田谷区の三宿駐屯地にある陸上自衛隊衛生学校 彰古館にて、今日に至るまで展示されている。

#### 4、ドレスデン衛生博覧会『大日本帝国目録』

乃木式義手は、欧米にてどのように紹介されたのか。その器械の構造については、明治44年のドレスデン衛生博覧会で付された小冊子『大日本帝国目録』（陸上自衛隊衛生学校 彰古館所蔵）の拙訳を紹介したい。

##### 義手（乃木式）

この義手（乃木式）は、日露戦争に於いて両腕を切断された者に対する憐憫の情から、乃木大将伯爵によって考案された。

この義手を用いると、指の働きをなす「やつとこ」の助けによって、茶をすすり、菓子を口に運び、たばこをキセルに詰めることが可能になるばかりか、それなりの練習を積んだ後には手紙を書くことすら出来るのである。

この義手は鉗子の形状に作られ、二つの柄を持っている。一方の柄は5つの関節〔連結部〕からなり、端には関節を身体に固定するため皮の帯のついたペロッテ〔球状の圧子〕がある。他方の柄は直線状で、端に籠型の骨組みがある。これは切断部の付け根に固定されている。使用に際してはまずペロッテを腕が失われた側の身体に固定し、籠状の骨組みがある二番目の方の柄を切断部の付け根にはめる。反発力によって腕を好きな方向に動かすことが出来る。

写真に見えるのは、1905年1月2日に満州の下坎子近郊で砲弾爆発によって両前腕および右目を失い、現在は東京の癩病院に収容されている、かつての輜重隊兵士である。

#### おわりに～戦傷病者史研究のために～

本稿では、乃木と石黒と癩兵との関係がわかる史料として、石黒忠恵談『乃木式義手』を

中心に史料紹介を行った。乃木式義手の意義は、乃木希典の「癪兵」への想いによって、石黒忠恵ら様々な人びとが義手の制作に関わり、能動義手のさきがけとなったことにある。今後の研究展望もふくめて、本稿をめぐる3つの視点を整理することで結びに代えたい。

第一に、乃木希典にとって義手とは何かという点である。日露戦後の乃木は、学習院での教育と、各地で盛んに建立された忠魂碑に揮毫するとともに、癪兵院の慰問に熱心であった。乃木は二人の子息を亡くしたとともに、多くの兵士を戦場で失った。陸軍大将としての自責の念は深いものであり、「癪兵」への思いも並々ならぬものであったことであろう。その現われが乃木式義手であった。乃木の『絵葉書帖』に収められた、癪兵の写真葉書を使って、日露戦争で傷ついた「癪兵」のことを学習院の生徒に伝えたと思われる。癪兵院はのちに傷兵院、傷痍軍人箱根療養所と名称を変えることになる<sup>26)</sup>。

第二に、軍医からの視点である。石黒忠恵をはじめ、戦時下における医療従事者（軍医・衛生兵・看護婦）は、目前にいる傷病兵をいかに治療して社会復帰させるかという課題に直面せざるをえない。臨時東京第一陸軍病院にて、多くの四肢切断者と出会い、リハビリテーションにあたった軍医・保利清は、四肢切断者が義肢をつけて母に会う心境を、「生んでくれた人と、生んでもらった時とちがった姿で相見ゆるといふことは如何ばかり辛いかは、私共によく分かるのである。」と述べて、再起のために“義肢に血が通うまで”に厳しい訓練の必要性を説く<sup>27)</sup>。

第三に、「癪兵」からの視点である。戦地で命を落とした戦友と、無事に帰還した戦友との狭間で、多くの兵士が傷つき、病に倒れた。「癪兵」、より広い概念での「戦傷病者」にとって、一生癒えることがない戦傷とは、かつて軍人であったことの証明であり、軍人でなければ戦傷を負わなかった幾許かの悔いでもあり、アンビバレントな感情が根底にあるだろう。戦争の時期・戦域によって戦争体験は様々である。乃木式義手は、単に実用された否かという医学史の視点だけではなく、戦傷病者にとって人生を前向きに生きるための器具という戦傷病者の視点こそが、今後の研究に望まれることであろう<sup>28)</sup>。

以上のように、「癪兵」が常にいた近代日本社会において、乃木式義手は、三者を繋げる稀有な資料である。

〔注記〕本稿執筆時に、埼玉県平和資料館 平成19年テーマ展Ⅱ「戦時救護一日赤看護婦たちの軌跡」における「軍医総監石黒忠恵と看護婦の登用」にて、乃木式義手が展示された。乃木式義手の使用例として、貴重な新史料である。これは、陸上自衛隊衛生学校 彰古館の所蔵に次いで、現存が確認された2個目になる。同展では、埼玉県比企郡 柿沼要平「義手使用詳細書」、明治40年 東京癪兵院々長 川崎寅三から柿沼にあてた書簡が展示された。今後の研究の進展を期したい。

〔謝辞〕史料閲覧では、広瀬淳子氏（学習院大学図書館）、花田裕子氏（院史資料室）、木村益雄氏（陸上自衛隊衛生学校 彰古館）、独逸語和訳では後藤秀和氏（学習院大学）にお世話になった。厚くお礼申し上げます。

## 注

- 1) 添田知道『添田啞蟬坊・知道著作集 4 演歌の明治大正史』（刀水書房、昭和 57 年）p.212。
- 2) 時代によっては「癪兵」「傷病兵」「傷痍軍人」など様々な言い方がある。今日では、「戦傷病者」と言い換えられることが多い。本稿では、その歴史性を重視して、日露戦争後に使用された「癪兵」という用語を使用したい。
- 3) 「特集 東京からなくなったもの 消えた街角、思い出の風景」『東京人』第 200 号（都市出版株式会社、平成 16 年）p.108。
- 4) 「陸軍軍医学校卒業式ニ於ケル御前講演集 四九 義肢ニ就テ」『陸軍軍医学校五十年史』（陸軍軍医学校、昭和 11 年）p.317。
- 5) 武智秀夫「日露戦争における切断・義肢と乃木式義手」『日本医史学雑誌』28-3（日本医史学会、昭和 57 年）・「わが国の義肢装具の歴史」『わが国の義肢業界の歩み』（社団法人日本義肢協会、平成 4 年）・『義肢装具とリハビリテーションの思想～手や足の不自由な人々はどう歩んできたか～』（「新樹会」創造出版、平成 7 年）。
- 乃木式義手に関する先行研究として、坪井良子「一軍人の手による義手—乃木式義手の開発—」『Journal of clinical rehabilitation』2-12（医歯薬出版、平成 5 年）・『日本における義肢装着者の生活援護史研究』（風間書房、平成 14 年）、木村益雄「〈彰古館往来 8〉乃木式義手」『防衛ホーム』第 602 号（平成 14 年）がある。
- 6) 山口県下関市立長府図書館『乃木文庫目録』（手写版）、「乃木家葬儀関係文書」「乃木文庫」『港区立港郷土資料館所蔵文書目録』（東京都港区教育委員会、平成 8 年）。
- 7) 諸井耕二「乃木伯爵家の蔵書を追う」『平成 10 年度 山口県立豊浦高等学校同窓会誌』。
- 8) 大正元年 9 月 12 日、乃木希典「遺言條々」（湯地定基・大館集作・玉木正之・静子宛）『乃木神社由緒記』（乃木神社、平成 16 年）。
- 9) 塚田清市「第 3 章 遺産整理 寄付」『乃木大将事蹟』（小林又七、大正 5 年）p.401～402。
- 10) 「第六 図書館 第二節 其の後の寄贈図書」（乃木院長所蔵図書の寄贈）『学習院史 開校五十年記念』（学習院、昭和 3 年）p.301～302。
- 11) 本目録は、昭和 2 年 1 月 21 日発会した学習院史学会 10 周年記念「手澤本を通じて観たる乃木院長の思想研究」において、継続事業として目録化したものである。以上、昭和 13 年 2 月、板澤武雄「後記」より。
- 12) 石黒の資料情報については、市川智生「石黒忠恵」（伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典 第 3 巻』（吉川弘文館、平成 19 年）が詳しい。
- 13) 「12、乃木將軍」『団報』第 265 号（陸軍軍醫団、昭和 10 年 6 月）。石黒忠恵「七 乃木大将の事」『懷旧九十年』（石黒忠篤、昭和 11 年）p.378～388。
- 14) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』第一編（学校法人学習院、昭和 56 年）・p.115。
- 15) 木村益雄「西南戦争と軍陣医学 2 西南戦争と乃木希典大将の負傷」『西南戦争之記録』第 3 号（西南戦争を記録する会、平成 17 年）に詳しい。
- 16) 松島不二「乃木大将考案の義手供覧」『国家医学会雑誌』第 234 号（明治 39 年）・「国家医学

- 会例会演説大要（10月1日開会）第一席 乃木大将考案の義手供覧『東京医事新誌』（明治39年）・「国家医学会例会 乃木大将ノ考案義手供覧」『中外医事新誌』第638号（明治39年）。松島不二の経歴については、現在調査中である。
- 17) 『国産鋼ペン先製造の始祖 石川徳松翁略誌』（ゼブラ株式会社）、『ペン先のあゆみ』（日本鋼ペン先工業組合、平成8年）。
  - 18) 松島不二「乃木大将考案の義手供覧」『国家医学会雑誌』第234号（明治39年）。
  - 19) 学習院大学図書館「乃木文庫」（貴重書庫・故乃木院長記念図書室100）。
  - 20) 保利清『義肢に血が通ふまで』（汎洋社、昭和18年）p.46。
  - 21) 鹿野千代夫編『乃木大将言行録』（東亜堂書房、大正元年）。東京癩病院の設置については、石井裕「東京癩病院の創設とその特質」『日本歴史』第693号（吉川弘文館、平成18年）が詳しい。
  - 22) 「乃木大将と癩病院」（学習院輔仁会編『乃木院長記念録』（三光堂、大正3年）p.587。
  - 23) 明治44年2月14日～8月31日「乃木將軍渡欧日誌」（乃木神社社務所編『乃木希典全集』下巻（国書刊行会、平成6年））p.389。
  - 24) 前掲書「乃木大将と癩病院」p.587～588。
  - 25) 陸軍軍医総監 秋山練造「寄せ書の乃木式義手の絵葉書に乃木將軍を偲ぶ」『日本医事新報』第680号（日本医事新報社、昭和10年）、陸軍軍医中將 秋山練造「石黒忠恵子爵閣下を偲ぶ」『軍醫団雑誌』（石黒子爵閣下追悼号）第347号（陸軍軍醫団、昭和17年）。
  - 26) 井上弘・矢野慎一『小田原ライブラリー 15 戦時下の箱根』（夢工房、平成17年）。
  - 27) 前掲書『義肢に血が通ふまで』p.32。
  - 28) しょうけい館（戦傷病者史料館）で制作された戦傷病者の証言映像「戦傷病者の労苦を語り継ぐ」では、受傷体験や療養生活といった戦中・戦後の労苦体験が分かる。

## ENGLISH SUMMARY

### Historical Materials concerning the Nogi Style artificial arm

— Communications between Nogi Maresuke, Ishiguro Tadanori, and wounded soldiers during the Meiji Period  
Masato OUCHI

The purpose of this paper is to present some historical materials concerning the Nogi Style artificial arm that enabled soldiers to hold goods. It was invented by Nogi Maresuke (General of the Army, president of the Gakushuin) and Ishiguro Tadanori (Surgeon General) in the Meiji Period for the soldiers wounded in the Russo-Japanese War (1904–05).

In this paper, the author discusses the following three sources:

- (1) The pamphlet titled “*Nogi Shiki Gisyu*” (the Nogi Style artificial arm) gifted by Ishiguro Tadanori to Nogi. This document explains how and why Nogi and Ishiguro invented the Nogi Style artificial arm (“Nogi Collection” in Gakushuin University Library).
- (2) The postcard of a half-length photograph of a wounded soldier with the Nogi Style artificial arm (“Nogi Collection” in Gakushuin University Library).
- (3) The German explanatory note for the Nogi Style artificial arm in the catalogue titled “*Dainihon Teikoku Mokuroku*” (The exhibition catalogue of the Empire of Japan), when the artificial arm was displayed in the Japanese Pavilion of International Hygiene Exhibition, Dresden, 1911. This document is now at the Shoko-Kan attached to Japan Ground Self-Defense Force Medical School.

These historical materials reveal both the sympathy of Nogi for the wounded soldiers, and also the

communications between Nogi, Ishiguro, and the wounded soldiers during the Meiji Period.

*Key Words:* the Nogi Style artificial arm, Nogi Maresuke, Ishiguro Tadanori, the wounded soldiers, the wounded servicemen